

1. 教育の責任

本学における建学の精神である「STUDY FOR LIFE(生涯にわたる、人生のための学び)」を踏まえて、学生各個人の「人生におけるウェルビーイング」を実現することを狙いとし、具体的には「生涯にわたって主体的に学び続けることのできる人材」の育成を自らの責務と捉え、そのための教育活動に取り組みます。

【2025年度に担当した科目】

- ・「アカデミックスキルズ」：春学期・秋学期/必修科目/2単位/のべ323名 4クラス(115名/72名/102名/34名)
- ・「キャリアデザインⅠ」：秋学期/必修科目/2単位/8名 1クラス
- ・「キャリアデザインⅡ」：秋学期/必修科目/2単位/7名 1クラス

2. 教育の理念

「生涯にわたって主体的に学び続けることのできる人材」の育成については、前項「1. 教育の責任」で取り上げた本学における建学の精神、加えて2012年の文部科学省中央教育審議会による答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』の内容等に沿った考えです。

今日においては学び直しのために大学で(再び)学ぶ選択肢をとることも一般的になりつつありますが、多くの場合「大学」は学生にとって学びの最終段階であり、社会に出る前の最後の学生生活の場となると考えています。そのため、在学中だけでなく卒業後においても「学生一人ひとりがよりよく生きるため」に必要な力や資質、経験を得ることに繋がる教育活動を意識しています。なお、私は本学では主に初年次教育に携わっているため、「高校から大学への移行」や、「大学での学習に必要な基礎の習得」が先ず以て目的となりますが、併せて、卒業後においても学び続ける学生の力(姿勢や自信、関心を含む)となるような機会を設計しています。

そのための教育-学習支援実践では、学びは学生の日常生活とともにあること、そして教員が何を教えたかではなく学生が何を学んだのかについて着目すること、を大切にしています。多様化するライフコースと学びとがどう関わり合うのか、学生が授業で何をどのように受け取ったのか/受け取れなかったのかに寄り添うことから、「学生一人ひとりがよりよく生きるため」に必要な教育のあり方を考えています。

3. 教育の方法

「生涯にわたって主体的に学び続けることのできる人材」の育成に向けて実践している教育-学習支援実践の工夫を記します。

具体的には主体的・対話的で深い学びを促すいわゆるアクティブラーニング型の授業実践(主に協同学習)に注力しており、また授業体験が「やりっぱなし」で終わらないよう、学びと学生のこれからを関連付ける言語化や省察の時間を大切にしています。

【授業における教育活動の工夫；科目「アカデミックスキルズ」を例に】

1) 学習(教科やテーマを含む)への動機付け

- 授業そのものへの動機付け；SA等と協同したクラスの(例えば丁寧・なごやか・相談しやすい等)雰囲気作り、リフレクション課題へのコメント返信、SAと協同したアイスブレイク活動や相談機会の設置等
- レポートを書くことと学生の人生経験との結び付け；ワークシートへの記入を通じたレポートを書くことへの意識や経験の整理等
- 文章(≒レポート)を書くことへの関心醸成；自分の考えや意見を他者に伝える/文字にするワーク、グループワークでの褒め合い等
- 苦手意識や拒絶反応の緩和；小さなステップの積み重ねによるレポート作成スケジュールの作成等

2) 他の学生との学び合い/支え合いへの動機付け

- 他者と学ぶ上でのルールやマナーの理解；協同の意味や価値の教示、毎授業グループワークの実施等
- ピア・サポート(ピア・レビュー)による他者と学ぶ価値や意義の実感；個人課題作成においても他者との協同が必要なワーク設計等

3) ナラティブを活用した授業の意味付け/学生と授業の関連付け

- 体験の言語化による学習内容の意味付け；省察の意義の教示、毎授業のリフレクショングループワークやリフレクション課題等
- 授業内容と学生の人生との関連付け；省察の意義の教示、毎授業のリフレクション課題、グランドリフレクション課題等

4. 教育の成果

「生涯にわたって主体的に学び続けることのできる人材」の育成という狙いの達成においては、現時点では評価が困難であるため、前項「3.教育の方法」を実践した結果、学生から寄せられた声を踏まえて記します。

授業におけるリフレクション課題への記述からは、次の2点、1) “他の授業に活かすことのできるアカデミックスキルの基礎を身に付けたこと”の実感、2)グループワークに関する“慣れ”の獲得と、“他者との協働が学習にもたらす相乗効果”の実感が読み取れます。

また授業アンケートからは、アカデミックスキル(主に文献の検索/文献の要約/レポート執筆/プレゼンテーション等)の習得が達成されたこと、その支えとなったのが授業の丁寧な教示や進行、学生の支援に取り組んだSAの人の人柄や距離感、サポートの質、さらには他の学生との支え合う関係性(レポートのミスを指摘し合えた等)であることが読み取れます。

私が担当する科目は主に初年次教育、なかでもレポートの書き方(アカデミックライティング)が主題であるため、そのスキルの習得がまずは学生目線で達成できたことは成果であり、それらを支えた要素は前項「3.教育の方法」で記した工夫によるものと受け止めています。

5. 改善への努力と今後の目標

これまでに「1.教育の責任」や「2.教育の理念」で記した「生涯にわたって主体的に学び続けることのできる人材」の育成という狙いについて、私個人がいかにかに追及できているかを測るための枠組みを十分に持ち合わせていません。この点においては、例えば各科目において学生に提示している「達成目標」の到達度合いを踏まえた評価や検証の枠組みの作成等が必要であると考えます。

加えて、具体的な科目における改善点として、授業アンケートからは「授業外学習時間の少なさ」が読み取れます。単位取得に必要なとされる所定の授業外学習時間を満たすことはもちろんのこと、学生が多忙な日常の中でも授業外で学びを進めたいとする取り組みや工夫を新たに考え、実践していくことが必要であると考えています。

【添付資料】

- ・各科目のシラバス
- ・各科目の学生アンケート結果